

# 日本英文学会東北支部 第66回大会資料

時：2011年11月26日(土)・27日(日)

所：東北大学川内南キャンパス  
(仙台市青葉区川内27-1)

日本英文学会東北支部事務局

(〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 東北大学文学部英文学研究室内)

TEL/FAX (022) 795-5961



# 日本英文学会東北支部第66回大会プログラム

時：2011年11月26日(土)・27日(日)

所：東北大学川内南キャンパス(仙台市青葉区川内27-1)

## 第一日 11月26日(土)

理事会 午前11時より(文学研究棟3階中会議室)

開会式 午後2時より(文学部第二講義室)

□開会の辞 日本英文学会東北支部長 大河内 昌

□東北英文学賞授賞式

受賞者 英文学分野 岩田 美喜 (東北大学准教授)

英語学分野 後藤 亘 (東北学院大学大学院)

**研究発表** 第1発表 14:30 - 15:05 第2発表 15:10 - 15:45  
第3発表 15:50 - 16:25

第一室(文学部第二講義室) 司会 山形大学教授 中 村 隆

1. “Wein, Weib und Gesang” —— *Philip* における Caroline の役割 ——

東北大学助教 市 橋 孝 道

2. 愛しき弟はどこへ行った?

—— 第一次大戦下のマンスフィールドの反戦意識と「前奏曲」——

東北学院大学大学院 畠 山 研

3. *Pyramid* (1967) における回想の構造 —— 地方都市のディストピア ——

東北学院大学非常勤講師 小 林 亜 希

第二室(文学研究棟311 講義室) 司会 仙台高等専門学校教授 飯 田 清 志

1. ソフト・パワーとしての『ローマの休日』

秋田大学教授 村 上 東

司会 富士大学教授 筑 後 勝 彦

2. *The Wild Palms* に於ける「法律」と「ルール」について

産業技術高等専門学校准教授 海 上 順 代

司会 米沢女子短期大学准教授 宇 津 まり子

3. ドメスティック・アドヴァイザーの小説の系譜 —— Helen Campbell を中心に ——

岩手大学専任講師 秋 田 淳 子

## 第三室（文学研究棟135講義室）

司会 東北学院大学准教授 岸 浩 介

1. パラレル・コーパスから見るタルミーの類型論における  
日英語の移動と変化の言語表現

東北大学大学院 斉 藤 珠 代

2. Cartography and Spell-Out Domains

東北大学大学院 戸 塚 将

3. 文頭に倒置された伝達動詞“Says”と“Said”

東北大学大学院 今 野 昌 俊

## 第二日 11月27日(日)

## SYMPOSIA (10:00 – 13:00)

## 第一部門（文学部第二講義室）

〈ゴシック〉を多角的に見直す

|       |          |         |
|-------|----------|---------|
| 司会・講師 | 東北大学准教授  | 岩 田 美 喜 |
| 講師    | 専修大学教授   | 末 廣 幹   |
| 講師    | 上智大学准教授  | 小 川 公 代 |
| 講師    | 学習院大学大学院 | 伊 藤 優 子 |

## 第二部門（文学研究棟311講義室）

ポストモダンとSF

|       |             |         |
|-------|-------------|---------|
| 司会・講師 | 八戸工業大学准教授   | 高 橋 史 朗 |
| 講師    | 東北工業大学准教授   | 高 橋 哲 徳 |
| 講師    | 福島高等専門学校准教授 | 中 山 悟 視 |

## 第三部門（文学研究棟311講義室）

省略現象の諸相 —— Sluicing とその他の省略現象との比較・対照を通して ——

|       |              |         |
|-------|--------------|---------|
| 司会・講師 | 東北大学助教       | 中 村 太 一 |
| 講師    | 東北学院大学大学院    | 後 藤 亘   |
| 講師    | ノースアジア大学助教   | 木 村 博 子 |
| 講師    | 日本学術振興会特別研究員 | 瀧 田 健 介 |

## &lt;第一日&gt;

11月26日(土)午後2時30分

## 研 究 発 表

## 第一室 (文学部第二講義室)

司会 山形大学教授 なか 中 むら 村 たかし 隆“Wein, Weib und Gesang” —— *Philip* における Caroline の役割 ——東北大学助教 いち 市 はし 橋 たか 孝 みち 道

サッカレー (William Thackeray, 1811-1863) 最後の長編小説である *Philip* (1861-62) は、主人公 Philip Firmin の人生を描いた作品として捉えられ、これまで特に高い評価を受けてこなかった。*Philip* が経験する出来事や困難 (若い頃の放蕩、父親との確執、金銭目当ての結婚、婚約の破綻など) には目新しさが少ないからである。しかし、このユニークさが乏しい masterplot は、執筆背景への配慮から、subplot との脱構築的な読みを促す。そもそもこの小説は、著者の妻の病氣ゆえに未完となった *A Shabby Genteel Story* (1840) の続編となっており、その物語の主人公 Caroline Gann は、*Philip* では Mrs. Brandon として非常に重要な役割を果たすからである。本発表では、主人公 Philip のだらしなさや甘えによって前景化される Caroline の賢明な働きぶりに注目し、創作時の著者の主な関心の所在を考慮して *Philip* を再評価したい。

## 愛しき弟はどこへ行った？

## —— 第一次大戦下のマンスフィールドの反戦意識と「前奏曲」 ——

東北学院大学大学院 はたけ 晶 やま 山 けん 研

ニュージーランド生まれのキャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923) による「前奏曲」(“Prelude,” 1917) は作者の幼い頃の回想が題材にされている。マンスフィールドが創作の舞台に故郷を選んだ背景には、1916年1月の日記に ‘I range with him [Leslie]’ とあるように、第一次世界大戦で死んだ実の弟レズリーと虚構のなかで遊ぶという動機があった。しかし、作者の家族を再現させた「前奏曲」のバーネル家にレズリーらしき人物は登場しない。従来の批評は、後年の作品「海辺にて」(“At the Bay,” 1921) でバーネル家に男の子が生まれるため、「前奏曲」でレズリーが不在であることを不問にしてきたと言える。けれども、第一次大戦下のマンスフィールドがあえて弟を書くことを思いとどまった理由を探ると、そこには作者の戦争に対する意識が垣間見られるのではないか。以上の内容を中心に、本発表では「前奏曲」と世界大戦の問題を考察する。

*Pyramid* (1967) における回想の構造 —— 地方都市のディストピア ——東北学院大学非常勤講師 こ 小 ばやし 林 あ 亜 き 希

*Pyramid* (1967) は、ウィリアム・ゴールドディング (William Golding, 1911-1993) の長編6作目に

あたり、作者の青年期を題材にした自伝的要素が濃厚な作品であると言われている。アレゴリカルな言語使用は影を潜め、1930年代の地方都市を背景にした写実的な描写が支配的であることから、これまでの他の作品とは異質な印象を与える。しかし、一人称の回想によって語られる三部構成の形式に着目すると、素朴な教養小説であると見做すことはできないように思われる。また、“Stillbourne”という架空の都市の生活が淡々と写実的に描かれているが、そこには“stillborn”(「死産」)のイメージが重ねられており、地方都市の暗部が描かれている。本発表は、語り手=作中人物 Oliver による回想の語りの構造を分析することによって、“Stillbourne”が記憶によって再構成されるのみならず、このリアリズムが偽装されたものであり、ディストピア小説として読みうることを提案したい。

---

## 第二室 (文学研究棟311 講義室)

---

司会 仙台高等専門学校教授 <sup>いい</sup>飯 <sup>だ</sup>田 <sup>きよ</sup>清 <sup>し</sup>志

---

### ソフト・パワーとしての『ローマの休日』

秋田大学教授 <sup>むら</sup>村 <sup>かみ</sup>上 <sup>あきら</sup>東

---

*Roman Holiday* (1953) は、Audrey Hepburn を世に出し、新しい女性像を銀幕に焼きつけた作品として知られる。同時に、名もないヨーロッパの小国のお姫様と合州国の新聞記者が繰り広げる恋愛劇にかたちを借りた国際関係の物語という側面も備えている。庶民の暮らしと民主主義社会の恋愛を封建主義の遺制からやって来た王女様に教えて差し上げるアメリカ人男性となれば、西側世界の盟主を標榜する合州国と重なり合うのである。

Joseph Nye が定式化したソフト・パワーの概念によれば、文化が持つ海外への影響力は軍事や経済に劣らず強大であるとされるのみならず、反政府的な表象でさえ民主主義を国是とする合州国にプラスの作用をもたらす。人種問題やフェミニズムもその例外ではない。

この発表は、『ローマの休日』が持つソフト・パワーを分析し、あわせて、この映画の背景にある冷戦期における左翼知識人の動向に目を向けるものである。

---

司会 富士大学教授 <sup>ちく</sup>筑 <sup>ご</sup>後 <sup>かつ</sup>勝 <sup>ひこ</sup>彦

---

### *The Wild Palms* に於ける「法律」と「ルール」について

産業技術高等専門学校准教授 <sup>うな</sup>海 <sup>がみ</sup>上 <sup>のぶ</sup>順 <sup>よ</sup>代

---

本発表では、*The Wild Palms* の先行研究で単独のテーマとして掘り下げられることの少なかった「法律」の在り方について検討したい。本作品では、法廷シーンが重要場面となっているが、登場人物個人の価値観、「ルール」も法律を凌ぐほどの意味を持っているのである。“The Wild Palms”と“Old Man”の主人公 Harry と the tall convict だけでなく、他の登場人物も自分の「信条」に従って行動し常軌を逸する傾向にある。しかし彼らに後悔は見られず、自分の「ルール」で行動し得た結果に満足または甘んじている。本作品では、個人の「ルール」の方が、国の法律より偏りなく現実に対応できて

いる場合があるのである。この法律と個人の「ルール」の対比と関連して、登場人物の状況描写に用いられるスポーツ・競技のメタファーが効果的に使われている点も検討したい。これらの点から *The Wild Palms* の「法律」と「ルール」の対照性と関係性を論じることが、本発表の目的である。

---

司会 米沢女子短期大学准教授 宇津まり子

### ドメスティック・アドヴァイザーの小説の系譜 ——Helen Campbellを中心に——

岩手大学専任講師 あき た じゅん こ  
秋 田 淳 子

1800年代に活躍していたアメリカ女性作家については、すでにさまざまな面において再評価も進んできている。たとえば、19世紀半ばに発表されていた女性作家たちの小説を、大きく“the sentimental novel”、“the Female Bildungsroman”、“the domestic novel”という3種に分けて論じることができよう。本発表は、1800年代の女性作家や作品としてすでに周知のものであるが、上記に指摘した小説群に連なるジャンルとして、ドメスティック・アドヴァイザーによる小説群の存在を改めて確認したい。家政学が確立した世紀末には、ノンフィクションの書物と小説の両者を著した家政学者たちがいる。本発表では、特に家政学者Helen Stuart Campbell(1839-1918)に焦点をあてながら、1901年に発表された *Ballantyne: A Novel*などを参照しながら考察をすすめたい。

---

### 第三室 (文学研究棟135講義室)

司会 東北学院大学准教授 きし こう すけ  
岸 浩 介

### パラレル・コーパスから見るタルミーの類型論における 日英語の移動と変化の言語表現

東北大学大学院 さい とう たま よ  
齊 藤 珠 代

本研究ではパラレル・コーパスという、文学作品の原典と翻訳で対応する言語表現を比較する手法を用いて、タルミーの類型論に検証を加えた。

タルミーは世界の言語が動詞フレームとサテライト・フレームの二種類に分かれると主張していて、この類型論はこの世界上で起こる5種類の事象(マクロ・イベント)に適用できるとした。その5つのうち、「移動」と「状態変化」を取り上げ、動詞フレーム型の日本語と、サテライト・フレーム型の英語のデータを比較し、それぞれのフレーム型を確かに示すかを検証した。結果、英語の状態変化では、きれいにサテライト・フレームを示さず、両フレーム型の混在が見られた。本研究では3つの先行研究をもとに、英語の状態変化ではなぜタルミーの類型論の例外的現象が見られるのかを考察した。

## Cartography and Spell-Out Domains

東北大学大学院 戸塚 将

Chomsky (2000, 2001) で提案されているフェイズ・モデルにおいてフェイズ主要部はCと $v^*$ であると仮定されている。フェイズ主要部が併合されるとその補部は意味部門と音韻部門へと転送され、フェイズ不可侵条件 (PIC) により統語操作の対象ではなくなる。本発表では Rizzi (1997, 2004) によるカートグラフィーの観点から、フェイズ主要部であるCを含むCPは $[_{ForceP} [_{TopP} [_{FocusP} [_{FinP} [_{TP} \dots]$ という多層構造を持ち、この中のFocusPが転送の領域を形成すると提案する。具体的にはTop主要部がフェイズ主要部であり、これが併合されるとその補部であるFocusPが意味・音韻両部門へと転送される。本提案により、話題話題化と焦点話題化との間の島の形成に関する非対称性が、FocusPが転送領域を形成することから導かれることを論じる。

## 文頭に倒置された伝達動詞 “Says” と “Said”

東北大学大学院 今野 昌俊

本研究は、Said John: “The newspaper is late again.” のような、英語の直接話法伝達部の主語と動詞が文頭の位置で倒置を起こす事例を考察する。これまでこの現象はその生起数の少なから文中や文末の位置での倒置とは一線を画し、文体上の問題などと例外的な扱いを受けることもあった。福地 (1985) は、先行文脈との結びつきで動詞の情報量が少ないとき、倒置が生じると述べる。また、Sonoda (1997) は、段落内のどの位置に生起しやすいかを調査した結果、段落の最終文に生起する割合が高かったことから段落を結んだり、要約するために使用されると主張する。本研究では “Says” と “Said” に焦点を当て、コーパスからデータを抽出し、使用域 (register) による生起数の傾向について考察する。報道文に特有な文体であると先行研究で指摘されるこの語順を量の面から再考し、その生起数とは反対に、母語話者の容認性には乖離があることを主張する。



## &lt;第二日&gt;

11月27日(日)午前10時00分

## SYMPOsia

## 第一部門 (文学部第二講義室)

## &lt;ゴシック&gt;を多角的に見直す

|       |          |                                                               |
|-------|----------|---------------------------------------------------------------|
| 司会・講師 | 東北大学准教授  | 岩 <sup>いわ</sup> 田 <sup>た</sup> 美 <sup>み</sup> 喜 <sup>き</sup>  |
| 講師    | 専修大学教授   | 末 <sup>すえ</sup> 廣 <sup>ひろ</sup> 幹 <sup>みき</sup>               |
| 講師    | 上智大学准教授  | 小 <sup>お</sup> 川 <sup>がわ</sup> 公 <sup>きみ</sup> 代 <sup>よ</sup> |
| 講師    | 学習院大学大学院 | 伊 <sup>い</sup> 藤 <sup>とう</sup> 優 <sup>ゆう</sup> 子 <sup>こ</sup> |

従来のゴシック批評は、主として小説(とロマン派の詩)を題材に、崇高美学および風景式庭園やフォリーと呼ばれる奇想建築との関連性を重視するもの、革命思想や資本主義など政治・社会的な文脈を読み解くもの、精神分析やフェミズム批評の観点からアプローチするものなどが多かった。もちろん、この概括からも自明のようにゴシック研究はすでに豊穡な批評領域であるが、18世紀末から19世紀のイギリスにおいて、<ゴシック的なもの>は、実際にはさらに広範な影響を持っていたのである。本シンポジウムでは、演劇、風刺画、身体論、映像メディアなど、従来のゴシック批評からは抜け落ちていた要素に光を当て、この領域の多様性を探っていきたいと考えている。

## Is There Terror in This Text? —— ゴシック演劇をイギリス演劇史に位置づける ——

末 廣 幹

Paul Rangerのチェックリストによれば、1750年から1820年にかけて、ロンドンの劇場において100本以上のゴシック演劇が上演されたことになる。しかし、標準的なイギリス演劇史においてゴシック演劇の意義が論じられることは稀有である。本報告の目的は、ゴシック演劇と何であったのか、さらにそこに何らかの演劇史的意義を認められるのかを愚直に考察することである。今から半世紀前にGeorge Steinerは、*The Death of Tragedy*において、「Thomas Otwayの時代からこのかた悲劇が不毛である」というLeigh Huntの発言を引用しながら、18世紀における悲劇の衰退とロマン派の文人による悲劇再生の試みを論じた。それでは、恐怖を主題とするゴシック演劇は、新たな悲劇を構築しようとしたのか。それとも、19世紀に流行するメロドラマの前哨なのか。John Homeの*Douglas* (1756)やMatthew Gregory Lewis *The Castle Spectre* (1797)を取り上げながら、こうした問題について考察したい。

## 19世紀初頭のゴシック小説の新しい試み —— サバイバル身体論 ——

小 川 公 代

18世紀にウォーポール、ラドクリフなどの「ゴシック小説」がイギリスを席卷したが、19世紀初頭には一度収束する。「拉致」、「監禁」、「暴力」といったゴシック的要素はジェーン・オースティンの

『ノーサンガー・アビー』(1818)などにパロディとして組み込まれたりした。しかしながら、19世紀初頭、家父長的な権力の行使や女性の無力といったモチーフはより一層重要な位置を占めるようになったともいえる。リン・ハントも指摘しているように、フランス革命以降、「バッド・マザー」の言説が大きくシフトし、マリー・アントワネットの猥褻な風刺画は、当時の検閲的な管理の象徴であったともいえる。その傾向を是正しようとして書かれたのがメアリ・ウルストンクラフトのゴシック小説『マライア』(1798)であろう。ゴシック・ヒロインの貞節が守られた時代に、墮落し投獄された女性や、以前娼婦であった女性看守を登場させ、彼女らの「自己保存 (self-preservation)」の能力をおおいに称えたこの作品は、新たなゴシックのジャンルを切り開いたといえる。本発表では、C. E. ヴォルニーの『自然の法則』(1796)における身体論(生存のため自らの身体を管理する考え方)が、『マライア』をはじめとする新たなゴシック小説(ルーカスの『地獄のキホーテ』(1801)やデイカーの『ゾフロージャ』(1806))の身体表象にどのような影響を及ぼしたのか、について考えてみたい。

## ヴィクトリア朝の風刺画にみるアイルランド人表象とゴシック・イメージ

岩 田 美 喜

『パンチ』や『トマホーク』などの、ヴィクトリア朝イングランドで流通していた雑誌には、アイルランド人にゴシック的イメージを重ねた風刺漫画がしばしば掲載された。たとえば、アイルランド独立を目指す秘密結社フィニア党の活動が活発だった19世紀半ばには、フィニア党員をアナーキストが創造した怪物と見なす「アイリッシュ・フランケンシュタイン」という画題が横行したし、また「アイリッシュ・ヴァンパイア」という主題も政治的文脈に合わせて幾度となく利用された。長引く土地戦争への苛立ちを示す風刺画では「殺されても蘇る the undead」としてのアイルランド農民が登場するかと思えば、1890年にC. S. パーネルが自治法案を成立させたさいには、彼が美女ハイバーニア(アイルランドの擬人化)の蠱惑的な肢体に襲いかかる吸血鬼として描かれる、といった具合である。

興味深いことに、こうしたゴシック的イメージの多用は、インド人など非アイルランド系植民地住民の表象にはあまり見られない現象である。ゴシックとアイルランドは、当時のイングランドのイマジネーションのなかでどのような関係を有していたのか——本シンポジウムでは、古典的な(無気味)論などもふまえつつ、実際に当時の風刺画を分析しながら、この点について考えてみたい。

## 映像で綴るゴシック

伊 藤 優 子

18世紀中期にはじまる一連のゴシック小説は、増加し多様化する近年のメディア、とりわけ映像によって描かれ続けている。ゴシック小説の嚆矢たるウォルポール『オトランドの城』(1764年)や後にゴシック演劇の一翼を担うM. G. ルイスによる『マンク』(1794年)の映像化に関していえば、『フランケンシュタイン』(1818年)や『ドラキュラ』(1897年)の製作本数と対照的であるが、むしろ特筆すべきは国際展開の前後を通じてシュルレアリスムに近接する点にあるだろう。本発表では、アド・キルー監督『サタンの誘惑(Le Moine)』(1972年)とヤン・シュヴァンクマイエル監督『オトランドの城(Otravský zámek)』(1973-79年)を中心に、書簡やインタヴュー、翻訳を含む原典との比較分析から黎明期の2作品が映像化される過程を明らかにし、近現代におけるゴシックの受容と進展を検討してみたい。

## 第二部門 (文学研究棟311 講義室)

### ポストモダンとSF

|       |             |                 |                 |                 |                 |
|-------|-------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 司会・講師 | 八戸工業大学准教授   | 高 <sup>たか</sup> | 橋 <sup>はし</sup> | 史 <sup>ふみ</sup> | 朗 <sup>あき</sup> |
| 講師    | 東北工業大学准教授   | 高 <sup>たか</sup> | 橋 <sup>はし</sup> | 哲 <sup>てつ</sup> | 徳 <sup>のり</sup> |
| 講師    | 福島高等専門学校准教授 | 中 <sup>なか</sup> | 山 <sup>やま</sup> | 悟 <sup>さと</sup> | 視 <sup>み</sup>  |

1960年代以降、SF文学といわゆるリアリズム文学との境界は急速に曖昧となるが、その背景に時間の不可逆性のような経験則にとらわれることのないポストモダニズムの潮流があることは言うまでもない。リアリズム文学とSF文学は、ポストモダンの中で相互に歩み寄ってきた。つまり、リアリズム文学のポストモダニストが「SF的な手法」を作品に取り入れる一方、SFもまたリアリズム文学の豊かな文学的背景を内包する形に進化した。本シンポジウムでは、ポストモダニズムとSFの関係性、SF文学におけるポストモダニズムの意義など、SFの表象におけるポストモダニズムについて、多面的な議論を展開したい。

#### 序論 ジャンルとしてのSFとポストモダニズムの関係性

高橋史朗

SFはScience Fictionであると同時にSpeculative Fictionでもある。また優れたSFにおいてその思索(speculation)の対象は、Ursula K. Le Guinが指摘しているように、リアリズム文学の場合と同じく人間であり文化や社会である。ただしSFでは、それらが小なり大なりわれわれの知っている世界と異なった環境に置かれ、その結果、われわれが見過ごしていたり無視していたりする問題や明瞭になっていない価値が前景化されることになる。モダンのコンテクストにおいて、このようなSFの異化効果は、モダニティを再認識させるとともに(おそらくは批判的に)考察することを求めるのであるから、それは常にポストモダンなレトリックである。

本発表では、ジャンルとしてのSFの特徴としての異化についての論考を紹介しながら、SFがもつモダニティを対象化する機能、および、文学そのものを異化する機能について議論する。特に、SF自身が文学としてのSFを対象化することとその文学史的な意義について考察し、以下に続く発表の背景を提示することとしたい。

#### 愛憎のアンビバレンス ——Kurt VonnegutとSF、あるいはポストモダン——

中山悟視

Kurt Vonnegutの小説はPhilip K. Dickと並んで、Bruce Sterlingのいうスリップストリーム、すなわちSFと純文学の境界解体という側面をもつ。Vonnegutは「SF作家」というレッテルに抵抗を示す一方で、現代におけるSFの重要性を語るとともに、「SF的な手法」を積極的に採用してきた。たとえば構想段階では一つの作品であった*Slaughterhouse-Five*(1969)と*Breakfast of Champions*(1973)は、時間の不可逆性や語りの一貫性は徹底的に疑われ、登場人物が時空間を自由に行き来し、Kilgore Troutによる作品内SF小説が重要な役割を果たし、過度なまでに自己内省的な語り手あるいは作者が物語に介在する。

本発表では、SF的手法やポストモダンのレトリックに改めて注目し、Vonnegut小説のポストモダン性と主題との関係性について考察したい。

## Philip K. Dickの諸作品とポストモダニズム

高橋 史朗

Philip K. Dickは一貫して、偶然と必然、現在と過去、生と死、機械と人間、真実と虚構、主観と客観という対立関係の境界を描いてきた。もちろんSFである以上、Dickの諸作品はこれらの対立関係あるいはそれらがもたらすであろう差異の絶対性を主張するものではなく、それを疑問視するような視座、つまり、境界の曖昧になった、あるいは、曖昧になりゆく世界を提示しているのである。しかもDickの主題はより絶対的な境界の曖昧化へ進む傾向がある。*A Scanner Darkly* (1977)に見られる主体の多重崩壊は、その最も顕著な例である。

従って、Dickの作品は、資本主義(と社会主義)、科学主義と進歩、精神分析、構造主義といったモダニティのもたらす「差異と意味」についての批判的な再解釈であるといえる。また、Dickの創作の史的過程には、既存の枠組みからの逸脱を常に試みようとするSFの特徴が顕在化している。本発表では、この二つの点について詳細を論じ、Dickの主題におけるポストモダニズムについて広範に考察する。

## ポストモダン、ロマンス、アイロニー

高橋 哲徳

Fredric Jamesonの論考を始めとして、20世紀後半の映画のポストモダンの側面には多様な考察が加えられているが、その重要な一要素として、Philip K. Dick的なアイロニーに満ちた、相反する要素の反転があげられるだろう。*Blade Runner* (1982)以降に限っても、彼の作品を原作とするSFは言うまでもなく、他のジャンルの映画にも同様の反転は見出される。ここにわれわれは、20世紀後半のSFとポストモダンの決定不可能性の詩学との親和性を確認しう。他方、科学技術の成果を参照しながらも写実主義的制約から自由なSFは、Northrop Fryeも言うように、一種の願望充足だという意味でロマンス的である。だが、対極的要素の反転にも似て、ロマンスの理解には二重性が伴うこともFryeは指摘している。本発表では、ポストモダン映画におけるDick的アイロニーの諸相を確認し、SF＝ロマンスのアイロニーの可能性について考察してみたい。

## 第三部門 (文学研究棟135講義室)

## 省略現象の諸相

## ——Sluicing とその他の省略現象との比較・対照を通して——

|       |              |   |   |   |   |
|-------|--------------|---|---|---|---|
| 司会・講師 | 東北大学助教       | 中 | 村 | 太 | 一 |
| 講師    | ノースアジア大学助教   | 木 | 村 | 博 | 子 |
| 講師    | 日本学術振興会特別研究員 | 瀧 | 田 | 健 | 介 |
| 講師    | 東北学院大学非常勤講師  | 後 | 藤 |   | 巨 |

中 村 太 一

従来の省略現象の研究は、先行詞と省略部分の間に課せられる意味的同一性条件の解明に焦点

が当てられてきた。しかし、近年では、sluicing とその他の省略現象との比較・対照を通して、統語的同一性条件の存在が明らかとなり、省略部分を認可する仕組みとの関連でも注目を集めている。本シンポジウムでは、sluicing を中心とした省略現象の比較・対照を行い、意味的・統語的同一性条件と省略部分を認可する仕組みについて討論を進める。

## Parallelism Condition on Ellipsis

木村博子

本発表では、省略現象に課せられる Parallelism Condition を扱う。従来、Parallelism Condition は、省略のもとで残余句となる要素が省略部分から移動により抜き出る際、当該の移動が、先行節との parallelism を保つように適用されることを要求すると考えられてきた (Fox and Lasnik (2003) 参照)。本発表では、残余句の移動を伴う一般的な分析を採用する代わりに、残余句が省略部分内の基底位置に留まるとする仮定をとり、先行詞と省略部分の間の parallelism 関係について新たな提案を行う。当該の提案の帰結として、省略現象のもとでの、long distance reading の可能性に関する複雑な対比が自然な形で捉えられると論じる。

## Voice Mismatches under Sluicing in English and Japanese

瀧田健介

省略現象に関する研究の中心的課題の一つに、省略要素とその先行詞との間の同一性は統語的に定義されるべきか、あるいは意味的に定義されるべきかという問題がある。本発表では、日英語の sluicing の voice mismatch に関する相違を通じて、この二種類の理論的位置付けに關しての提案を行う。英語に關しては、VP-ellipsis と sluicing では前者のみが省略要素と先行詞との間の voice mismatch を許すという観察に基づいて、統語的同一性の必要性が論じられている。これに對して、まず日本語の sluicing は英語と異なり voice mismatch を許すことを指摘し、この観察が日本語の sluicing は項省略によって派生されるという分析のもとで、項省略が意味的同一性にのみ従うと提案することで説明されることを論じる。その帰結として、統語的同一性と意味的同一性は共に必要であるが、それぞれ異なる省略操作に關与しているという結論が導かれる。

## A Mechanism of PF-Deletion under the Probe-Goal System

後藤 亘

本発表では、削除が適用される際に必要な素性 [Delete] をフェーズ主要部 C に仮定し、Chomsky (2008) の probe-goal システムを用いて、イタリア語の pro-drop 現象、ドイツ語の topic-drop 現象、そして、英語の sluicing および VP-ellipsis 現象に對して統一的な説明を与える。イタリア語の pro-drop は、C から T へと継承された [Delete] 素性を担う Agree 素性の探査を介することによって派生されるのに対して、ドイツ語の topic-drop と英語の sluicing および VP-ellipsis は、C の edge 素性の探査を介することによって派生されると提案する。本発表の帰結として、従来想定されてきたような pro や Spec-Head Agreement は削除部分の認可において不必要であるということと、削除部分からの要素の抽出は禁止されることを示す。



## 大会会場（東北大学川内南キャンパス）へのアクセス

### ○仙台市営バス

仙台駅前バスプール前

#### 9番のりば

#### 【行き先】

宮教大・青葉台行  
青葉通經由動物公園循環

#### 【下車停留所】

東北大川内キャンパス・萩ホール前  
(約15分、運賃180円)

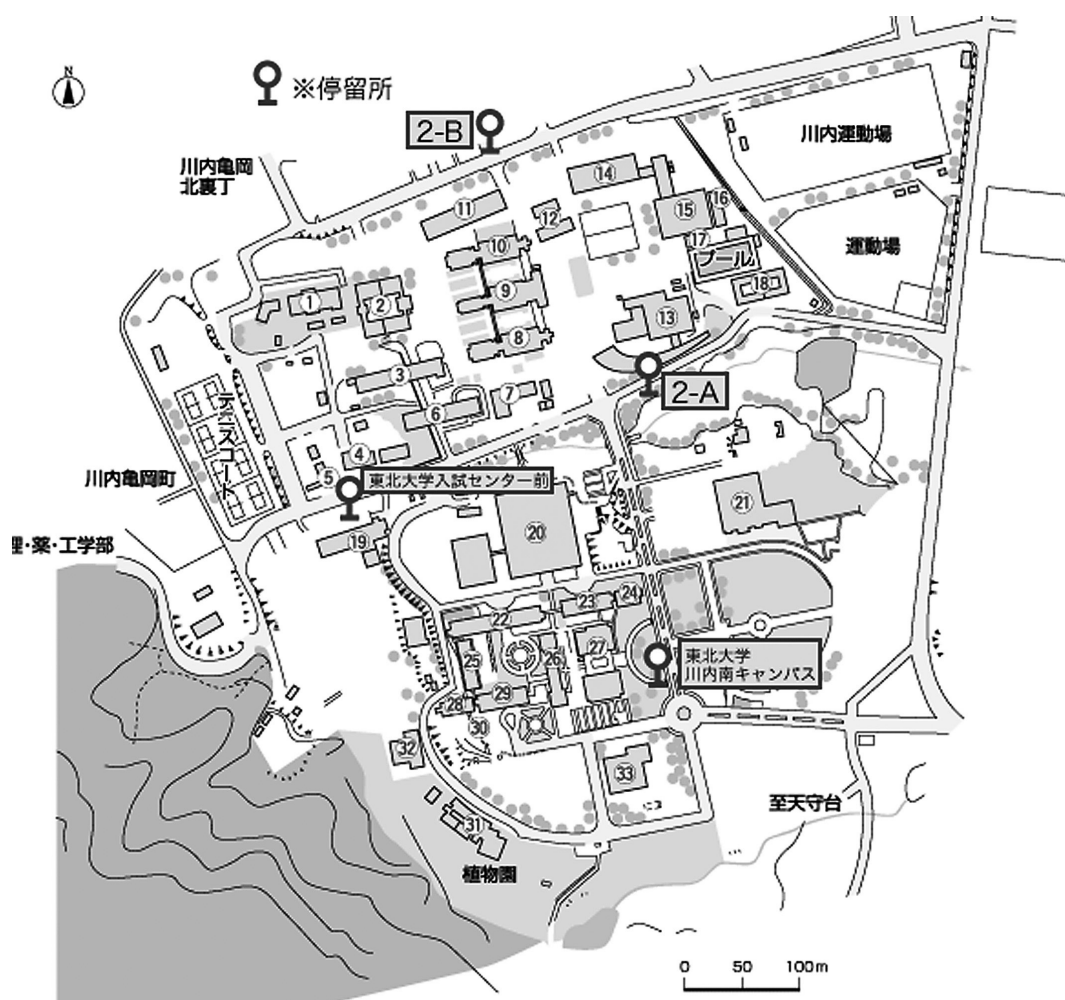
【2-A】

#### 16番のりば

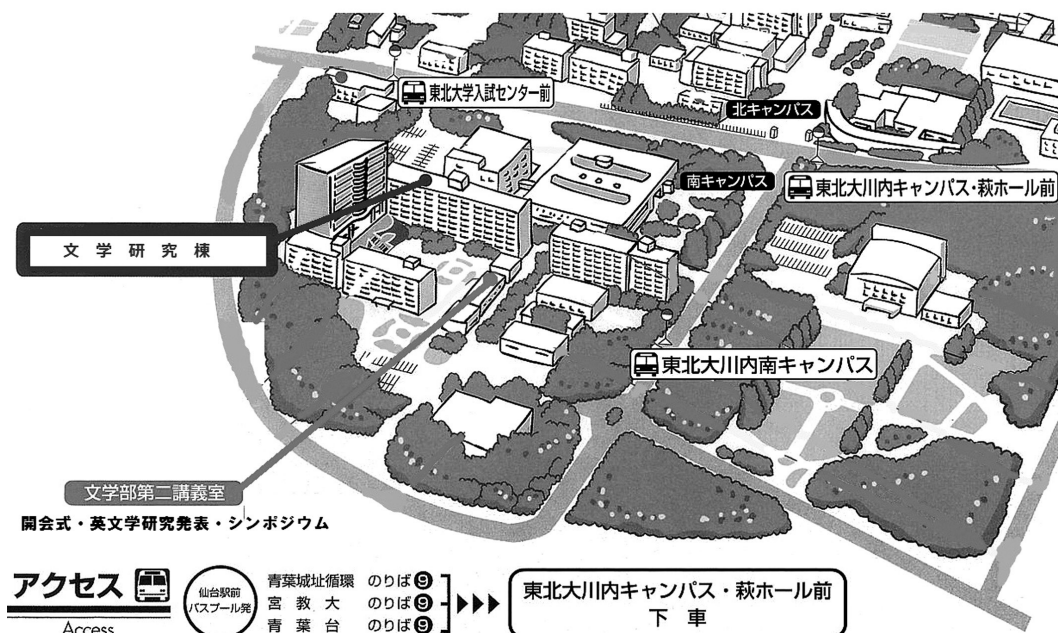
広瀬通經由交通公園・川内(営)行  
広瀬通經由交通公園循環

川内郵便局前下車  
(約15分、180円)

【2-B】



## 東北大学 (川内南キャンパス) 施設案内



## 文学研究棟教室配置図

事務局・大会本部

|    |                |               |               |                |             |                        |                 |     |           |
|----|----------------|---------------|---------------|----------------|-------------|------------------------|-----------------|-----|-----------|
| 3階 | コンピュータ室<br>340 | 339<br>演習室    | 337演習室<br>337 | 中会議室<br>335    | 小会議室<br>334 | 非常勤講師<br>教職員談話室<br>333 | 文学研究科図書室<br>331 | E V | 教育<br>329 |
| 階  | 317<br>視 聴 覚 室 | 315<br>315講義室 | 314<br>出版室    | 311<br>311講義室  | 女 子<br>W. C | 男 子<br>W. C            | 309<br>教 育      |     |           |
| 階  | 控え室            |               |               | 米文学研究発表・シンポジウム |             |                        |                 |     |           |

|    |                |                   |                    |                    |                 |              |                          |            |                |
|----|----------------|-------------------|--------------------|--------------------|-----------------|--------------|--------------------------|------------|----------------|
| 2階 | 219<br>大 会 議 室 | 研究科長室<br>237      | 事務室<br>(庶務)<br>235 | 事務室<br>(会計)<br>232 | 窓<br>口          | E V          | 230                      |            |                |
| 階  |                | 218<br>副研究<br>科長室 | 217<br>事務長<br>室    | 216<br>休養室         | 215<br>コピー<br>室 | 213<br>書類保管室 | 212<br>ミーティ<br>ング<br>ルーム | 211<br>更衣室 | 208<br>法 学 研 究 |
| 階  |                | 女 子<br>W. C       |                    |                    |                 |              |                          |            |                |

英語学・英語教育学研究発表・シンポジウム

予備

|    |              |                    |                    |               |             |            |            |             |            |
|----|--------------|--------------------|--------------------|---------------|-------------|------------|------------|-------------|------------|
| 1階 | 120<br>学生談話室 | 院生会室<br>(共)<br>138 | 135講義室<br>135      | 133講義室<br>133 | E V         | 倉庫<br>130  | 機械室<br>129 |             |            |
| 階  |              | 119<br>第2入試<br>倉庫  | 118<br>社会連携<br>推進室 | 116<br>第1入試倉庫 | 115<br>書類倉庫 | 114<br>物品庫 | 113<br>X線室 | 多目的<br>W. C | 109<br>電気室 |
| 階  |              | 女 子<br>W. C        |                    |               |             |            |            |             |            |

玄 關

## 第66回大会懇親会のご案内

今年度の懇親会は下記のとおり開催されます。お気軽にご参加いただければ幸いです。

【日 時】 2011年11月26日(土) 午後6～8時

【場 所】 アークホテル仙台 2階 オリーブルーム

〒980-0804 仙台市青葉区大町 2-2-10 tel: 022-222-2111

【会 費】 7,000円

### 仙台駅より

【徒 歩 の 場 合】 JR仙台駅2階ペデストリアンデッキより青葉通りを直進、約15分。

(ダイエー仙台店前で地下道に入り、5番出口の階段を上って直進)

【バスご利用の場合】 JR仙台駅西口のバスターミナル9番乗り場／宮教大・青葉台行きで約10分。

大町西公園前下車、徒歩約1分



### 川内南キャンパスより

【徒歩】 川内南ロータリーより東へ直進。広瀬川を渡り、「大町」交差点を直進。約20分。





# 日本英文学会東北支部

## 2011年度 大会役員一覧

(敬称略・五十音順)

支 部 長 大河内 昌

副 支 部 長 箭 川 修

|   |   |         |         |         |
|---|---|---------|---------|---------|
| 理 | 事 | 阿 部 潤   | 石 幡 直 樹 | 岩 田 美 喜 |
|   |   | 遠 藤 健 一 | 金 子 義 明 | 後 藤 史 子 |
|   |   | 齋 藤 博 次 | 佐々木 和 貴 | 鈴 木 亨   |
|   |   | 鈴 木 雅 之 | 田 中 一 隆 | 村 上 東   |

|        |         |         |         |
|--------|---------|---------|---------|
| 大会準備委員 | 飯 田 清 志 | 岩 田 美 喜 | 宇 津 まり子 |
|        | 川 崎 和 基 | 中 村 太 一 | 西 田 光 一 |

開 催 校 委 員 金 子 義 明

|       |               |             |
|-------|---------------|-------------|
| 事 務 局 | 岩 田 美 喜(事務局長) | 市 橋 孝 道(庶務) |
|-------|---------------|-------------|